



米作りと畦と植調剤

(財)日本植物調節剤研究協会 近畿中国四国支部長 西尾隆雄

平成の凶作と、米の輸入が一度にやってきて米の市場はおおいに混乱した。そして安い外国米が動いて、輸出国も日本も米価が上昇したのには驚いた。更には今年作付けの米には泥田買いが行われていると聞くと、農家の間では特別栽培米への意欲が高くなっているという。食管制度前、米価が乱高下し、米騒動も起きたという大正の末期、昭和の初めが偲ばれる。

野菜の貿易は外国が売り込むというより、日本の商社が開発輸入をするので国産野菜の価格が軒並みに低迷しているらしい。規正緩和、自由化と声高に叫ばれるが、農村部、高令層の活性維持という視点から如何がなものであろう。米価の最近の高騰も、大凶作とタイ米の緊急輸入にともなう一時的な現象とする見方が濃厚である。安全でうまい米でありさえすれば、総て高値で流通するだろうというのは幻想であろうと思う。

それはそれ、今年の五月は私共周辺の中山間水田地帯は活気が感じられた。水田作業者の主体に壮年層の比重が高くなり、トラクターの作業も耕うんだけでなく、均平のための土運び、施肥、畦作りなど多様になった。晴天が続くこともあってか、余裕をもって畦草刈、砕土作業が徹底し、田植えもすんだ。

ところで畦は大抵が畦シートの内張りである。畦草を焼いたあとには、もぐらの孔が少なからず見られる。畦が低くなって、やっとシートが畦越しの水を防いで水深を保っている。畦シートの下からの漏水で、隣のそら豆田は5m位

が水浸しである。

お互いにあきらめてはいるが、何とかしたいという気持ちは強いようだ。用水堰入れの共同作業後の酒席で、彼岸花ともぐら、ねずみの話を持ち出すと膝を乗り出す人が少なくない。大規模受託耕作田の畦草が村の問題になるようになった。ソフトボール、シニアクラブのチームメートは、水田耕起は楽だが、畦草とシート張りは大へんと云う。

農業土木の設計に関与する立場で公共事業によるは場整備の仕事を見ていると、どうも畦の機能と、一枚ほ場の用排水系統への配慮が熟していない。施工基準が、高さ、巾、つき固めといった土工の範囲にとどまって草生は意識の外にある。水稻の耕作者は、そこにある畦の管理に精を出し、改良といえ、コンクリート畦畔であった。水稻栽培研究者(技術者)も耕作者と同じようなものだ。コンクリートの畦は、機械作業との相性、畦構造の改造、水田景観等の視点から、私はとりたくない。

深水による冷害の回避、除草剤の安全有効使用、特に乾田直播ではよき畦が成否を決する。植調協会が、カバークロップと抑草剤の両面から今この問題にアプローチした見識は大いに評価されるべきである。発展を期待し、協会の一員として努力を惜しまないつもりだ。企業の寿命30年説があったが、協会30周年、新しいジャンルに取り組む勇気を、協会関係者はおおいに自負してしかるべきである。